

タイ語の「形容詞」に関する一考察 —名詞修飾節の観点から

平地 祐章

キーワード：タイ語, 形容詞, 名詞修飾, 関係詞, 類型論

1. はじめに

タイ語において、いわゆる「形容詞」をどのように位置づけるかについては非常に多くの議論がなされている。例えば Prasithratsint (2000) は動詞の下位分類であるとしているし、一方で Post (2008) は、言語類型論的にはあらゆる言語に形容詞が存在すると考えるべきであるとする Dixon (2010) の主張を否定するデータは提示できないとし、事実上、形容詞が存在することを容認している。Post (2008) は形容詞と動詞が区別できるとする根拠の1つとして、名詞を修飾する場合に好まれる手法の違い、すなわち関係詞 *thi* を必要とするかどうか、ということを挙げている。しかしながら、タイ語母語話者に確認してみたところ、関係詞 *thi* を必要とするか否かは、形容詞と動詞の本質的な違いとは無関係に、別の要因で決定されそうであることがわかった。そこで本研究では、「形容詞」および動詞と、名詞修飾節との関係を再検討し、その結果 Prasithratsint (2000) の主張に沿い、タイ語には形容詞という独立した語彙範疇を認める必要はないと結論づける。

2. タイ語概説；先行研究

まずタイ語について簡単に説明する。本研究で扱うタイ語は、バンコクを中心に使用されている標準タイ語であり、以降は単にタイ語と呼ぶこととする。形態論的には孤立語であり、語形変化は起こらず、語順が文意を決定する。統語論的には、「主語—動詞—目的語」の、いわゆる SVO の語順をとる。修飾関係については、否定辞等わずかなものを除いて、専ら後置修飾の形をとる。また日本語のように、主題を文頭におくこともあり、文脈で判断できるようであれば、主語などの項が省略されることも許され、実際にも頻繁にみられる。

こうしたタイ語について、『言語学大辞典』の中で三谷 (1989) は、タイ語の形容詞は言語類型論的に動詞的な特徴をもつとした上で、「動詞類」という分類の中に形容詞を含めている。また程度の副詞による修飾や比較表現が可能であるという形容詞的な性質は、個々の語の意味的特徴によるものだとし、『いわゆる形容詞を動詞とは別の品詞とする統語上の理由を見いだすことの方がむしろ難しい』(三谷 (1989): 540) としつつ、最終的に『統語論とは別個に品詞論を述べること自体が、意味あることかどうか、考えてみる必要があるであろう』(三谷 (1989): 538) としている。Prasithratsint (2000) も同様に、動詞の下位分類であるとしている。

これに対して Post (2008) は、タイ語には形容詞が存在する、という直接的言及は避けているものの、存在を認めていると考えられる。以下に根拠を示す。Dixon (2010) は言語類型

論的にはあらゆる言語に形容詞が存在すると考えるべきだ、と主張しているが、この主張を否定するためには、「形容詞」について、例えば動詞のような別の語彙範疇とは異なる扱いをすることがあらゆる点において不可能である言語が、存在していなければならない、と Post (2008:379) は言及している。しかしながら、Post (2008) がさまざまな基準および構文について、いわゆる「形容詞」や別の語彙範疇の分布を調査すると、この証明はできなかつたとつづけて述べた。そのため、タイ語に形容詞が存在することを事実上認めていると考えられるのである。また Iwasaki and Ingkaphirom (2005) も同様に、形容詞と別の語彙範疇との相違点を挙げているが、こちらは形容詞の存在について明確に言及している。

3. 名詞修飾節の検討

2 節で紹介した Post (2008) や Iwasaki and Ingkaphirom (2005) は、「形容詞」とほかの語彙範疇を区別できる基準として、名詞修飾節をその 1 つに挙げている。Dixon (2010: 70) も述べている通り、名詞を修飾することは形容詞のもつ大きな特徴の 1 つといえるが、その手段はさまざまであるとも言及している。例えばラテン語やスペイン語は、形容詞が名詞に近い特徴をもつといわれるが、こうした言語の形容詞は ‘*a cute girl*’ のように必ず直接に名詞を修飾できるとしている。一方で中国語やベトナム語では、形容詞は動詞に近い特徴をもつといわれる。この場合は、形容詞も動詞と同様に、‘*a girl who is cute*’ のごとく関係節をもって名詞を修飾することが多く、これが必須である言語も存在すると言及されている。また上に挙げた例にみるように、英語はこのどちらの手段も取りうる。他にも、カリブ語族の中には、形容詞を名詞化したうえでないと名詞を修飾できない言語もあるようである Dixon (2010: 92)。このように、形容詞が名詞を修飾する手段は多く存在する。

3.1. タイ語における名詞修飾節

ではタイ語の場合はどうであろうか。Prasithrathsint (2000) の指摘している通り、タイ語の「形容詞」は動詞と酷似した特徴をもつ。例えば、どちらも自動詞の述部となる、修飾詞 *máak* 「とても」によってどちらも修飾できる、といったものが挙げられる¹。そしてその中の 1 つに名詞修飾がある。タイ語の場合「形容詞」は名詞を直接修飾することもできるし、関係節をもつても修飾することもでき、いわば上で例を挙げたような英語のような言語といえるため、紹介した Dixon (2010: 72) の言及とは少しずれている。しかし動詞も同様に、直接に名詞を修飾でき、関係節でももちろん修飾できるのである。実際の例は後にみることにする。しかしながらここで問題は、前述したようにタイ語はもっぱら後置修飾の形をとるため、英語のような語順になることはない。つまりむしろ焦点は関係詞の有無にあり、関係詞の有無にかかわらず、「形容詞」も動詞も名詞を修飾できる、と換言できるのである。

そうした背景をもつ名詞修飾であるが、Post (2008) は関係詞の有無によって以下のよう

¹ Post (2008) や Iwasaki and Ingkaphirom (2005) も「形容詞」と動詞の類似点は認めており、多くの例を挙げているため、ここでは紹介のみにとどめておく。詳細は前述の先行研究を参照されたい。

な意味の差異が存在するとしている。次の (1) は Post (2008: 358) の引用であるが、グロス等の英語の部分は日本語に置き換えるなど、若干の変更を加えている。

(1) a. *kʰon* ϕ *pʰúut pʰaasǎa aŋkrít* *cʰǎp maa ʔǎastreelia*

人 ϕ 話す 言語 イギリス 好む 来る オーストラリア

「英語を話している (タイ) 人は、オーストラリアに来ることが好きだ」～

「英語を話しているその (タイ) 人は、オーストラリアに来ることが好きだ」

b. *kʰon* *tʰii* *pʰúut pʰaasǎa aŋkrít* *cʰǎp maa ʔǎastreelia*

人 関係詞 話す 言語 イギリス 好む 来る オーストラリア

「英語を話すその (タイ) 人は、オーストラリアに来ることが好きだ」

Post (2008) は (1a) のように関係詞がない名詞修飾節を ‘*attributive clause*’ と呼び、一方で (1b) のように関係詞がある名詞修飾節を ‘*relative clause*’ と呼んで区別した。そして、後者は ‘*a known referent*’, つまり話し手も聞き手も共通に知り指し示すことのできる特定の個人や事物を指し、対して前者は、‘*a known referent*’ を指すこともあるが、基本的には ‘*a class of entity*’, すなわちある一定の漠然としたグループを指す、とした。さらに、動詞は (17b) のように関係詞を用いることが多く、一方で「形容詞」の場合は、(17a) のように関係詞を用いないことのほうが多い、とする仮説を立て、これをコーパス調査で明らかにした (Post (2008: 362))。そして最終的に、この原因について、関係詞のない節と「形容詞」は、本質的にある事物の固有の性質について言及する一方で、関係詞のある節と動詞は、本質的に特定の出来事を言及するために、両者はそれぞれの名詞修飾の形をとることが好まれる、と主張したのである。

以上の議論には関係詞の省略という問題がかかわってくるが、Iwasaki and Ingkaphirom (2005: 249-251) はこのことについて詳細に述べている。まず、関係節の中でいわゆる先行詞が主語の位置を占め、かつ一般的な行為をあらわす場合には、関係詞は省略可能としている。またこの条件を満たしていたとしても、特定の時間が明記されるなどして特定できる出来事であることが示されている場合には、関係詞の省略は不可能であるとしている。例えば、Iwasaki and Ingkaphirom (2005) の例の日本語訳を挙げれば、「昨日その子供を噛んだ人」の場合は関係詞を省略できない。一方でその直後に例外も挙げており、「昨日ご飯を作った人」の場合は、特定の出来事をあらわしているとしても、「ご飯を作った人＝料理人」のように、職業などあるグループの人が担う役割のような一般的な行為として認識できるようであれば、関係詞は省略可能とした。このことは先行詞が目的語の位置を占める場合にも適用され、例えば「(その人_aを) 扱うのが難しい人_a」のような例文でも、「扱いにくい人」のように一般的に概念として認識可能であるという理由から、関係詞は省略できるとしているのである。

Iwasaki and Ingkaphirom (2005) はこのように関係詞の省略について述べているが、これに語彙範疇の区別という問題は織り交ぜていない。一方 Post (2008) はこの主張に沿いながら、先に述べたように、「形容詞」は関係詞がない文を好む傾向にあるが、動詞は関係詞を必要とする傾向にあるとした。しかしながら Iwasaki and Ingkaphirom (2005) の展開した主張には例外も多く、そのため「形容詞」および動詞のような語彙範疇の問題と、関係詞の有無との間の関係にも疑問の余地が残る。そこで本研究では、関係詞の有無が決定される要因は、むしろ別のところにあり、「形容詞」の立場を決めるための基準としては妥当ではない、と考える。このことについて以下で詳細に検討する。

3.2. 調査

タイ語において名詞修飾節の含まれる文をタイ語母語話者に読んでもらい、その自然度を判断してもらうことによって、名詞修飾節と「形容詞」および動詞との関係を調査した。以下の例文はすべて自作である。各例文の許容度の判断にご協力いただいたのは、千葉大学の学部および大学院に在籍中のタイ語を母語とするタイからの留学生の数名である。それぞれ日本語での会話はほぼ問題なく行える程度の日本語能力を有しており、そのため各文の日本語の意味についても確認してもらった。

まず次の (2) から、名詞修飾節内の主要部が動詞である場を検証しよう。

(2) *kʰáw pen kʰon kʰàp rót*

3sg. コピュラ 人 運転する 車

「彼は車を運転する人である」～「彼は運転手である」

上の (2) では *kʰáwpen kʰon* 「彼は人である」の後に *kʰàprót* 「車を運転する」という動詞句が続いているが、この動詞句は直前の名詞 *kʰon* を修飾している。いわば (1a) のごとく ‘attributive clause’ である。ただし *kʰon kʰàprót* は「運転手」としていわば複合名詞のように一般に認識されており、実際あらゆる辞書で項目として登録されている。またこの文においては、職業としてではなく、単純に「車を運転できる」という意味でも用いられる。この点は前述した Post (2008) の主張に合致しており、すなわち ‘attributive clause’ は ‘a class of entity’ を指すという、その人の一種の固有の性質を示すものであると考えられるのである。

これに対して次の (3) は、関係詞が入った文であるが、こちらは非常に不自然であるという反応を得た。

(3) *kʰáw pen kʰon tʰi kʰàp rót *(kèn)*

3sg. コピュラ 人 関係詞 運転する 車 上手な・に

「彼は車を* (上手に) 車を運転する人である」

ところが *() と示した通り, *kèj* 「上手な」² のように別の語句が続いた場合は, 問題なく容認できるようである。しかしながらこれは特定の出来事をあらわしているわけではないにもかかわらず関係詞の存在を容認しているため, Post (2008) の主張には沿っていない。また Iwasaki and Ingkaphirom (2005) が言及しているように, 確かに *k^hon k^hàp rôt* は職業として解釈可能であるため関係詞の省略は可能であるが, このことと文末の *kèj* の存在は無関係であるはずである。そのため, これまでの先行研究の主張とは異なる説明が必要であるといえるのではないであろうか。

続いて (4) および (5) をみてみよう。(4) は (2) の文末に, 指示詞 *níi* 「この・これ」を加えたもので, (5) はさらに途中に関係詞を入れたものである。この場合はどちらも自然に使用できるようであり, やはり先行研究の主張に沿っているとはいいいがたい。

(4) *k^háw pen k^hon k^hàp rôt níi*
 3sg. コピュラ 人 運転する 車 この・これ
 「彼はこの車を運転する」

(5) *k^háw pen k^hon t^hü k^hàp rôt níi*
 3sg. コピュラ 人 関係詞 運転する 車 この
 「彼はこの車を運転する」

次に, 否定辞が入った文についても調査を行った。次の (6) は *máy* という否定辞を名詞修飾節に加えた例であるが, この場合も関係詞の有無にかかわらず問題なく許容できるといふ結果を得た。

(6) *k^háw pen k^hon (t^hü) máy k^hàp rôt*
 3sg. コピュラ 人 関係詞 否定辞 運転する 車
 「彼は運転を好まない人だ」(直訳では「運転をしない人だ」³)

しかしながら, (4) や (5) のように, この文末に指示詞 *níi* を加えた (7) のような場合は事情が異なった。というのは, 否定辞の直前に関係詞が入っている場合は問題ないが, 関係詞がない場合はやや不自然とされたのである。

² この *kèj* は「形容詞」とされるものであるが, 動詞句の後ろにあらわれる場合など, 副詞としての機能も存在することが知られている。Post (2008: 353) はこのことについても詳細に分析しており, 同じ位置にあらわれるもので, 動詞として扱えるものは存在しないと, これも「形容詞」と動詞を区別する基準の1つとしている。しかしながら副詞としての機能からみた場合の分析であり, 統語的な語順からみると, 同じ位置に動詞があらわれることも非常に多く, 事実副詞とみなされることも少なくない。ゆえに本研究では, このことも「形容詞」と動詞を区別する基準にはなりえないと考える。また以上から, 以降はグロス上では「上手な」のように代表的な意味のみを示すこととする。

³ この解釈は, あるタイ語母語話者によってご指摘いただいた。次の (7) にも同じ解釈が適用されている。

(7) *kʰáw pen kʰon ? (tʰi) máy kʰàp rót ní*
 3sg. コピュラ 人 関係詞 否定辞 運転する 車 この

「(この車は友人のものであるが汚いため,) 彼はこの車の運転を好まない人だ」

以上では名詞修飾節に動詞が含まれている例を検証してきたが、関係詞の有無については、先行研究の主張とは合致しない点も多く見受けられることがわかるだろう。では続いて「形容詞」が含まれている例をみてみよう。

(8) *kʰáw pen kʰon dii*
 3sg. コピュラ 人 よい

「彼はよい人だ」

上の (8) は単純に「形容詞」*dii* が直前の名詞を修飾しており、もちろん問題ないという反応を得た。一方で次の (9) のように関係詞が入ると、すでにみた (3) のように、さらに語彙が続かない場合は不自然のように感じられるようである。

(9) *kʰáw pen kʰon tʰi dii ?((mák) máak)⁴*
 3sg. コピュラ 人 関係詞 よい とても

「彼はとてもよい人だ」

次に、名詞を修飾するのが単独の「形容詞」ではない例を示す。この (9) に挙げた *caydii* は、直訳すると「心がよい」となるが、いわば複合形容詞として「優しい」という意味で、一般に理解されており、実際に辞書にも記載がある。この場合は関係詞の有無は理解の妨げとはならないようである。

(10) *kʰáw pen kʰon (tʰi) cay dii*
 3sg. コピュラ 人 関係詞 心 よい

「彼は優しい人だ」

一方、否定辞が加わった場合には差異が生じるが、動詞の場合とは少し状況が異なるようである。まず単に *dii* の前に否定辞をおいただけの (11) のような場合は、関係詞の有無にかかわらず容認された。

⁴ 最後の *máak* は「とても」を意味する副詞であり、Post (2008 365) も認めているように「形容詞」も動詞もどちらも修飾できるものである。またその直前に (*mák*) となっているのは、この語が重複形となりうることを示す。このことは後述の (12) の文にかかわってくる。重複形については Post (2008 364) でも扱われているため、合わせて参照されたい。

- (11) *kʰáw pen kʰon (tʰü) mây dii*
 3sg. コピュラ 人 関係詞 否定辞 よい
 「彼は悪い人だ」

ところが文末に「とても」をおく場合には、異なる様相を示す。関係詞がない次の (12) のような場合には、*mâak* は重複形でないと不自然である、という結果となった。

- (12) *kʰáw pen kʰon mây dii ?(mák) mâak*
 3sg. コピュラ 人 否定辞 よい とても
 「彼はそれほどいい人ではない」

一方で、関係詞が間に入る (13) のような場合には、重複の有無にかかわらず容認されるようなのである。

- (13) *kʰáw pen kʰon (tʰü) mây dii (mák) mâak*
 3sg. コピュラ 人 関係詞 否定辞 よい とても
 「彼はそれほどいい人ではない」

3.3. 分析

以上、3.2. では独自に調査した例文から、関係詞の有無と「形容詞」および動詞との分布をみてきた。その中で、先行研究の展開した主張では不十分な点を指摘した。では、関係詞の有無にかかわるのはどのようなものだろうか。

ここでまず考えられるのは、節の長さ、さらにいえば文としての成立度である。(3) や (9) のように、関係詞が存在し、かつその節を構成しているのがそれぞれ *kʰàprót* および *dii* という非常に短い語句である場合、さらにその後に *kèy* や *mâak* といった語彙が続くことが要求された。これは関係詞から始まる関係節は、ある程度長い文として成立していなければならない、と考えられる。同様に (12) においても、*mâak* は単独でなく重複形にすることで、少しでも文を長くしたほうが、タイ語母語話者にとっては自然に感じられたと推察できる。つまり関係詞 *tʰü* は、直後に続く節としてある程度は長い文を要求するのだと考えられるのである。実際、聞き取り調査では、関係詞 *tʰü* の直後で、文の切れ目があるかのごとくポーズを入れる話者が多かった。つまりたとえ名詞を修飾するとしても、関係詞の後からはひとまず別の文として認識され、そのためポーズを入れるからにはそのあとの文は短いものであっては不自然である、と結論づけられるであろう。さらにいえば、3.1. でみたような先行研究の主張は、三谷 (1989) のようにあくまで個々の語彙の問題であり、関係詞の有無と本質的に関係しているのは文の長さであって、いわゆる「形容詞」を動詞と区別するための基準として用いるのは妥当ではないと主張する。

また、韻律関係も関係詞の有無には関係しているのではないかと考えられる。Bennett (1994) は、タイ語は ‘iambic foot’ つまり弱強型の韻脚がみられる言語であると述べている。これは単語にかかわらず文全体に適用できることで、例えば (2) の例文は、文末の *rót* に韻脚の右端を合わせるとすると、次の (2)’ のようにフットが存在すると分析できる。ここでは括弧で韻脚を示している。

(2)’ (*kʰáw*)⁵ (*pen kʰon*) (*kʰàp rôt*)

一方で (3) のような場合には、関係詞が入ったことにより、この韻律関係が崩れてしまう。ゆえに *kèŋ* というさらに別の語彙を加えることで、次の (3)’ のように適切な韻律関係をなすことができると考えられるのである。

(3)’ (*kʰáw*) (*pen kʰon*) (*ʰũ kʰàp*) (*rót kèŋ*)

同様に、関係詞がない場合に重複形を要求するという、以上とはまた異なった現象も説明できる。つまり (12) の例も重複形にすることで、実に美しい韻律が導き出せるのである。

(12)’ (*kʰáw*) (*pen kʰon*) (*mây dii*) (*mák máak*)

もちろんさらなる調査は必要であるが、Post (2008) や Iwasaki and Ingkaphirom (2005) の主張では不十分であることは十分に示しているといえるであろう。

4. まとめ

4.1. 結論

本研究では、タイ語のいわゆる「形容詞」の位置づけをめぐって、形容詞は独立した語彙範疇として認めるべきであるとする主張がその根拠の1つとしている、名詞修飾節における関係詞の分布について、調査を用いながら再検討を行った。その結果、関係詞のない節は本質的にある事物の固有の性質について言及するため、修飾節内が「形容詞」であることが多く、一方で関係詞のある節は、本質的に特定の出来事について言及するため、修飾節内が動詞であることが多いとする先行研究の主張は、一因とはいえるかもしれないが、「形容詞」と動詞を区別するための基準としては妥当でないことを確認した。むしろ、関係詞の有無と関係しているのは文の長さや韻律といった別の問題であり、現状タイ語において「形容詞」と動詞を区別する必要はなく、「形容詞」という語彙範疇を認める必要はないと主張する。

⁵ 文頭の *kʰáw* が単独の韻脚を構成しているが、平地 (2016) が明らかにしたように、音節が無声阻害音で終わらない場合、さらに声調が ‘High tone’ である場合には、この音節は重いと考えられる。ゆえに単独で韻脚をなすことは妥当であり、むしろ後続の動詞と韻脚を構成し弱強型の弱位置となるのは望ましくないといえる。

4.2. 今後の課題

まず必要なのは先行研究におけるほかの基準の精査である。本研究では名詞修飾という一例をとりあげたが、Post (2008) が「形容詞」を別の語彙範疇と区別しうる基準として挙げている例はほかにも多く存在する。本当に「形容詞」を認める必要はないとする立場をとるのであれば、これらすべての基準を検証する必要があるであろう。

また本研究で行った調査方法の見直しも必要である。今回は1文ずつ読んでもらう形をとったため、文脈が考慮されず、また前後に読んだ文の影響も否定はできない。加えて作文をしてもらうなど、別の方法も検討すべきといえる。

関係詞の有無を決定するものとして挙げた、文の長さもあいまいであるといわざるを得ない。いろいろな例を収集して、ある文が長いとされる基準の語彙数というものを示すべきであろう。

そして最後に触れた韻律関係の分析である。本文中に述べた関係詞の直後のポーズや、文全体にかかるイントネーションとのかかわりなど、文の韻律構造を分析することは難しい。以上のようなことを念頭におき、さらに精練された主張を導いていきたい。

参考文献

- Bennett, J. Fraser (1994) "Iambicity in Thai," *Studies in Linguistic Sciences* 23, 39-57
- Dixon, R.M.W. (2010) *Basic Linguistic Theory: Volume 2: Grammatical Topics*, Oxford University Press
- Iwasaki, Shoichi and Preeya Ingkaphirom (2005) *A reference grammar of Thai*, Cambridge University Press
- Post, Mark (2008) "Adjectives in Thai: Implications for a functionalist typology of word classes" *Linguistic Typology* 12(3):339-381
- Prasithrathsint, Amara (2000) "Adjectives as verbs in Thai", *Linguistic Typology* 4(2):251-272
- 平地祐章 (2016) 『タイ語の音節構造と声調との関係について』千葉大学大学院修士論文
- 三谷恭之 (1989) 「タイ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典；第2巻；世界言語編 (中)』三省堂, 529-545

(ひらち ひろあき・人文社会科学研究所)